

01	弥生文化とは？ 弥生時代とは？	4
02	弥生文化をどのようにとらえるのか	8
03	縄文文化から弥生文化への変容	12
04	弥生文化・弥生時代の枠組み	16
05	弥生文化の農耕技術	20
06	弥生文化の食糧事情	24
07	日常生活の道具	28
08	弥生文化の集落	32
09	人びとのすがたと人口	36
10	集落間、地域間の関係の進展	40
11	祭祀・儀礼の発達	44
12	集団間の争い	48
13	墓からわかること	52
14	弥生文化の世界観を探る	56
15	弥生文化をとりまく世界	60
16	石製利器から鉄製利器へ	64
17	祭祀の変質	68
18	墳丘墓の展開	72
19	記録された弥生文化	76
20	前方後円墳の成立	80
21	超大型集落の終焉と弥生社会の特質	84
	訪ねてみたい弥生文化関連遺跡	88
	本書で紹介した遺跡	90
	おもな引用・参考文献	92

# 05

## 弥生文化の農耕技術

弥生文化の遺跡からみつかるとある水田には、ある共通した特徴がみられます。自然の微傾斜を利用して水の管理（灌漑\*）をおこなう点と、一枚一枚の面積が小さい小区画水田だという点\*です。これらの特徴は朝鮮半島の無文土器文化の水田にもみられ、大陸に系譜をもつ、ひとつの技術系統として理解できます。畠\*についても、まだ発見例が限られているものの、やはり朝鮮半島を経由した大陸起源の技術系統である可能性が高そうです\*。私は、九州北部で弥生文化がはじまったところに、これらの技術が同時に定着したと考えています。

ちなみに私は、農耕そのものは縄文文化にもあったといっていると思っています。縄文農耕をめぐっては戦前から議論がつづいてきましたが、植物遺体の研究が進展したことで、クリやイヌビエ、マメ類などに、人が関与したことによる形態や遺伝子の変化が認められることが明らかになってきました。もちろん農耕の定義だけで話は変わるのですが、少なくとも縄文文化の人びとが、長く植物の栽培をおこなってきたことは間違いありません。そしてそうした経験や技術の蓄積が、水田・畠の技術を受け入れる土壌になったのだと考えています。

一方、縄文文化の農耕をめぐっては、古くからコメ・ムギ・アワなどの存在も指摘されてきました。実際に炭化した種子が見つかっていましたし、圧痕の分析によってこれらの存在が確実視されたこともありました。しかし現在、そうした証拠の再検討が進み、すべてに問題があることがわかってきて、確実なものはいずれも弥生文化のはじまり前後からのものと考えられるようになっていきます。コメは前述の水田稲作技術と、アワ・キビは畠作技術とともに、弥生文化がはじまったところに九州北部一帯に定着したと考えてよさそうです。

ここで東アジアにおける農耕技術の歴史に目を向けると、水田稲作は揚子江中下流域でおよそ一万年前に、アワ・キビの畠作は中国東北部〜華北一帯でおよそ八〇〇〇年前にはじまったと考えられます。畠作は、その後二〇〇〇年ほどで朝鮮半島南部にまで広がり、水田稲作は山東半島を経て三千数百年前に朝鮮半島南部に伝わりました。

当時の農耕技術の展開は自然の条件に大きく左右されてきました\*。畠作は土壌pHに強く制限され、降水量の少ない弱酸性〜中性のエリアに広がりました。一方、水田はイネの生育が可能となる気温や水量などに左右され、降水量の多い暖かい地域で主要な農耕技術になりました。朝鮮半島はこの二つの技術の南限・北限にあたっていたのです。

一方、雨の多い日本列島は水田には適しますが、畠作には不適です。また山の多い日本列島には、水田に適した微傾斜をもつ低地が点在していました。水田は畠作にくらべて単位面積あたりの生産量が高い耕地です。こうした日本列島の自然環境の特徴と水田の生産性の高さが相まって、弥生文化においては、水田稲作が主要な農耕技術になっていくのです。

\* 私は、こうした特徴をもつ水田を「自然微傾斜利用の灌漑型小区画水田」とよんでいる。

\* 比較的平坦な土地で営まれ、耕起をおこない、耕作面を水でおおわない耕地を畠としておく。

\* 朝鮮半島では、畠にいくつかの技術系統が認められる。弥生文化にみられるのは、そのうち比較的平坦な土地に等高線と直交するように畝を形成する非灌漑型の畠と、水田の縁辺で営まれる小規模な畠である。

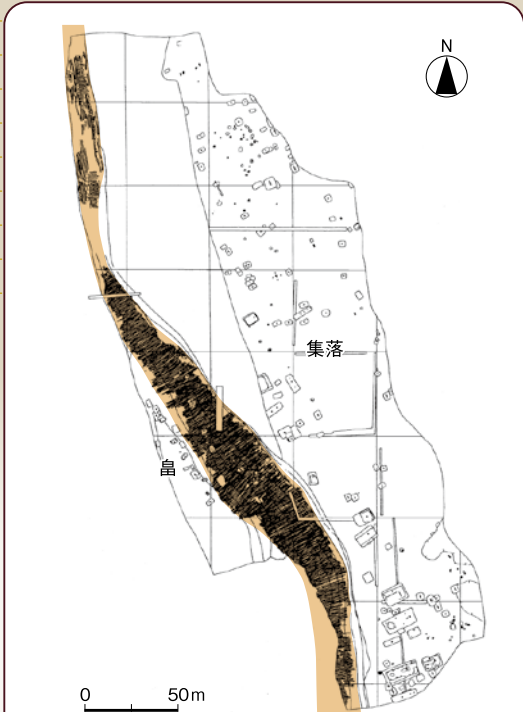
\* 植物が必要とする栄養素の多くは、土壌pHが中性〜弱酸性の状態でもっとも有効化する。温帯域では、年間降水量一〇〇〇ミリ以下の地域に中性〜弱酸性の土壌が多く、雨が多いと強い酸性を示すようになる。一方、耕地を水でおおう水田の場合、土壌pHに関係なく土壌が中性となり、加えて畠で生じやすい連作障害や地力の消耗もある程度抑えることができる。そのため生産量を抑えれば、無施肥でも連続してコメの生産が可能となる。

# 05 弥生文化の農耕技術

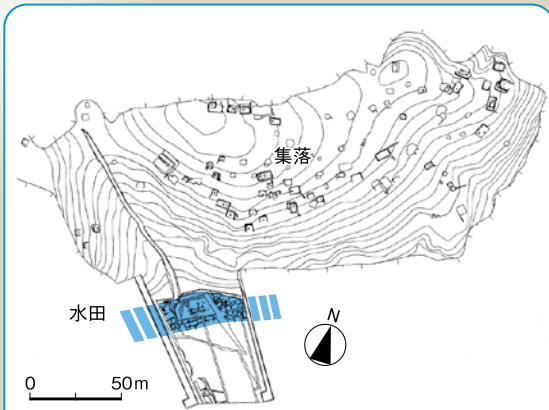
縄文文化に農耕の技術があったとしても、それは、身近にある植物の管理や栽培にとどまっていたようである。一方、弥生文化のはじまりと関係する農耕技術には、自然微傾斜利用の灌漑型小区画水田と、耕起・畝立てをおこなう畝があり、これらは、紀元前10世紀ころ朝鮮半島からほぼ同時に日本列島に伝えられたと考えられる。その後しばらくして、弥生文化の広い範囲が水田稲作中心の生活へと移行していく。



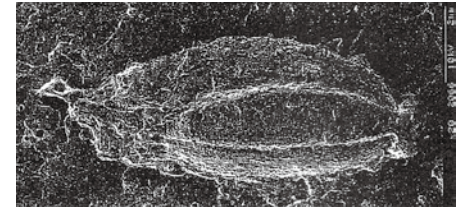
① 東アジアにおける農耕技術の展開過程 アワ・キビ畝作は年間降水量1000mm以下の弱酸性～中性の土壌地域に、水田稲作は温暖でイネの栽培に必要な水を確保できる地域に広がった。約3500年前以降の朝鮮半島では両者が組み合わさっていた。



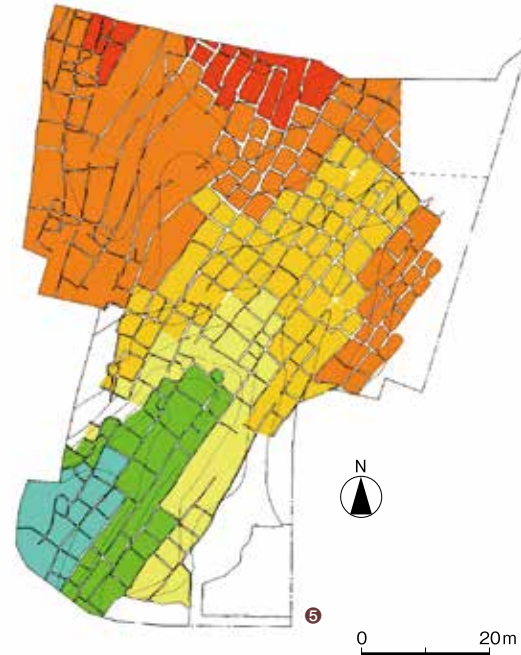
② 朝鮮半島無文土器文化の畝跡 河川の自然堤防上に集落が、低地におりる緩やかな斜面に畝が形成される。畝が等高線に直行するのが特徴。無文土器文化前期・慶尚南道大坪里遺跡



③ 朝鮮半島無文土器文化の水田跡 丘陵上に集落が、丘陵下の微傾斜地に水路をもつ小区画の水田が形成される。無文土器文化中期・慶尚南道玉峯遺跡



④ 列島最古のコメの証拠 刻目突帯文土器の最古型式（九州北部の弥生文化のはじまりの直前ころか）についた圧痕。ただし、コメの存在＝水田稲作の定着ではないことに注意。晩期縄文文化・島根県板屋川遺跡



⑤ 高知県田村遺跡の水田跡 前期の水田跡。自然の微傾斜を利用して水田面に配水する。小区画は微傾斜のある土地で、1枚ごとの水田の水深を一定に保つ工夫。水田面の高さを20cmごとに色分けしてみた（赤：高→青：低）。

⑥ 大阪府池島・福万寺遺跡の水田跡 灌漑用水路をとまなう広大な水田跡が検出された。後期



⑦ 群馬県有馬遺跡の畝跡 台地上の集落内で営まれた小規模な畝。現在までのところみつまっている弥生時代の畝跡はいずれもごく小規模なものである。ただ、低地の自然堤防などの微高地では、②のような比較的規模の大きな畝が営まれていた可能性もある。

# 06

## 弥生文化の食糧事情

弥生文化の主要な農耕技術は水田稲作でした。ただ当然のことながら、人びとはコメだけで生きていたわけではありません。弥生文化は時間的にも空間的にも変化の大きい〈文化〉なので、生活を支える食糧生産のあり方は、時期や地域によって大きく異なっていました。

関東以西の多くの地域では、弥生文化のはじまりからしばらくすると、人口が顕著に増加していきます。そして、それとともに水田稲作中心の生活が営まれるようになっていきました。自然の資源の量には限りがあり不安定でもあるため、人口の増加とともに、生産性が高く、日本列島の環境に適していた水田への依存度が高くなっていったのです。

一方、各地で弥生文化がはじまったころや、水田可耕地が少ない地域では、コメへの依存の割合が相対的に低かったと考えられます。また、水田稲作が中心となった地域でも、各種栄養素の摂取源としてコメ以外の食糧が必要だったことはいうまでもありません。そのため地域や時期ごとに違いをみせつつも、畠でのアワ・キビ・マメの生産、**イノシシ類の飼養\***、狩猟・漁撈・採集といった、さまざまな食糧生産活動が組み合わさっていたと考えられます。弥生時代の食糧事情をめぐっては、まだまだわからないことがたくさんあります。弥生文

\* 関東以西の弥生文化の集落では、イノシシ類が飼われていた。技術の詳細はまだよくわからないが、大陸のブタの飼養技術との関係が注目される。

化がはじまったころを含む、人口密度が低かった時期や地域では、周囲の自然条件に応じた自給自足的な食糧生産をおこなうことが多かったのかもしれない。一方で、顕著な人口増加がみられる地域やそうした地域の周辺では、個々の集落や地域が周囲の環境に合わせて水田稲作以外の特定の生業に力を入れ、生産物を交換するような分業的關係が早くから発達していた可能性もあります\*。後期や終末期になると、明らかに水田稲作に不向きな海浜部や山中の交通ルートに、集落が急増加するような地域もみられ（08章③参照）、集落間や地域間の食糧の動きが、より活発にかつ複雑になっていったことが考えられます。

ただ、全体を俯瞰してみれば、人口増加を支えた食糧の増産は、水田稲作を中心になされていたはず。そのため弥生文化では、縄文文化にくらべ、食糧の基本構成が均質化していったと考えられます。日本列島において畠作中心の集落が数多く形成され、畠作物が人口を支える食糧として大きな役割を担うようになるのは、牛馬飼養と組み合わさった新たな畠作技術が大陸からもたらされた、古墳時代中期以降のことでした。

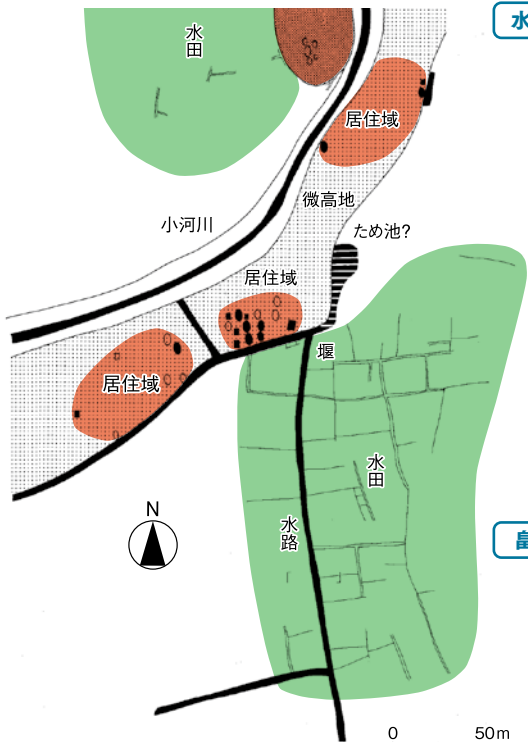
ちなみに、集落と水田のほぼ全体がとらえられた静岡県登呂遺跡では、住居跡数と水田跡の面積からコメの消費量の試算が可能です。登呂遺跡では、単位面積当たりの生産量を低く見積もっても、年間の熱量の半分程度をコメでまかなっていた計算になるとの研究\*があります。関東以西では、より人口密度が高かったと考えられる時期や地域も少なくなき、そうした地域では、さらに水田稲作への依存度が高まっていたとしても不思議ではないのです。

\* たとえば九州西北部の五島灘一帯や神奈川県三浦半島では、漁撈活動に特化していたと考えられる遺跡が存在する。

\* 乙益重隆の研究による「弥生農業の生産力と労働力」『考古学研究』第二五巻第二号、一九七八年。



弥生文化の食糧をめぐるのは、時期差、地域差を含め、さまざまな意見がある。弥生文化に限らず、何をどれくらい食べていたのかを具体的に明らかにすることはむずかしいからである。まずは確実性の高い資料にもとづき、日本列島の気候、地形、土壌、人びとが利用した動物・植物の生態、集落・集落群のあり方や人口の変化、そしてさまざまな道具類についての研究成果などを広く見渡しなが、生業の実態に迫っていくことが必要である。

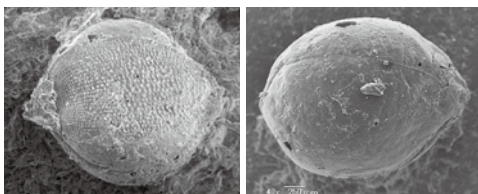


水田稲作



②炭化した籾・稲穂 集落遺跡からは、よく炭化した籾が出土する。多量の籾がまとまってみつかることもある。稲穂は収穫されたときの状態をとどめたもの。近年、北條芳隆によって、こうした束が貨幣のような機能をもっていたのではないかという考えが示されている。前～後期・奈良県唐古・鍵遺跡

畠作



③土器の器面に残るアワとキビの圧痕 東北地方を除く各地の縄文文化末期～弥生文化成立期の遺跡からは、アワ・キビの種子や圧痕がよくみつか。縄文文化的な生活においては、初期的な労働投下量が少ないことに加え、移動によって連作障害も回避できるため、畠作のほうが生活に組み込みやすかったのだろう。やがて農耕への依存度が高まり、人口も増加し、さらに集落が長期間継続するようになると、畠作に不利で水田に適した日本列島の自然条件が影響し、各地で急速に水田稲作が生業の中心になっていった。前期・神奈川県中屋敷遺跡

④ドングリ用貯蔵穴 西日本では、早～前期を中心にドングリ用の貯蔵穴が見つかることがある。縄文文化の遺跡にもみられるもので、食糧としての貯蔵、あるいは水田や畠の突発的な減収に備えるためのものだったのかもしれない。前期・大阪府高宮八丁遺跡

①静岡県登呂遺跡一帯の居住域と水田 登呂遺跡では後期の居住域と水田の全体像がとらえられた。住居跡の数から推定できる人口と、水田の面積から推定できるコメの生産量との関係から、コメの消費量を計算できる。

採集



No.	遺跡名	遺構	コメの出土量	時期	備考
1	下種田(福岡)	A12号貯蔵穴	1500～2000ℓ	前期	
2	唐古・鍵(奈良)	101号竪穴	1斗以上	前期	
3	鷹取五反田(福岡)	4・5号貯蔵穴	4号:4.1kg、5号:5.7kg	中期	
4	津古牟田(福岡)	2・7・8号貯蔵穴	約26ℓ、約12ℓ、約64ℓ	中期	
5	中原(福岡)	40号土坑	コンテナ5箱分	中～後期	
6	袖比坂(佐賀)	方形ピット	厚さ30cm以上の層	後期	
7	貝元(福岡)	181号土坑	相当量(2.5×1mの範囲)	後期	
8	浄福寺1号(広島)	SS8・9貯蔵穴	多量	後期	
9	佐紀(奈良)	1431号土坑	1斗に及ぶ	後期	
10	橋原(長野)	59号住居跡	35万粒(約50ℓ)	後期	
12	領家(岡山)	31号住居	300ℓ以上	終末期	
13	榎田(長野)	SK16700	63kg(100ℓ以上)	終末期	
11	真田北金目(神奈川県)	155号住居跡	5341.2g(10ℓ以上)	終末期	

⑤コメの多量出土例 炭化したコメ(籾)の多量出土例は全国的にみられる。100ℓを超える例も少なくない。

No.	遺跡名	遺構	穀類の種類、量	時期	備考
1	雀居(福岡)	12次019号土坑	マメ:112g	前期	コメ:276g
2	門田・辻田(福岡)	土坑9基合計	マメ:867、コムギ2	前期	コメ:495
3	立岩(福岡)	袋状ピット	アワ:20	前期	コメ
4	稲里(滋賀)	2号土坑	アワ:45、キビ:3	前期	コメ:300以上
5	中屋敷(神奈川県)	9号土坑	アワ:1871(5cc前後)、キビ:26、マメ:1	前期	コメ:393
6	一色青塚(愛知)	10・15号土坑	マメ:各15	中期	コメ:2149、3204
7	橋原(長野)	住居址8軒合計	雑穀:二千数百、マメ:約180	後期	コメ:約50ℓ
8	田子山(埼玉)	21号住居跡	アワ:194993(500～600ccか)、マメ:339	後期	コメ:81481(約2ℓ)
9	中郷谷(千葉)	035住居跡	キビ:22.5g(100cc前後か)	後期	
10	笹井原(福岡)	94号住居跡	ササゲ:576(100～150cc程度)	後～終末期	コメ:226
11	二本木(大分)	3号住居跡	マメ類:多量	終末期	
12	梅坪(愛知)	SB615住居跡	マメ科:12、半割約100	終末期	
13	慶應SFC(神奈川県)	27号住居跡	アワかヒエ:22	終末期	コメ:約200
14	代継・富士見台(東京)	18号住居跡	アワ:62	終末期	

⑥雑穀の出土例 雑穀の圧痕は多数確認されているが、雑穀がコメのように多量に出土した例は今のところ皆無である。生産量・消費量ともにコメとは格差があったと考えざるをえない。

飼養・狩猟



⑦集落から出土した動物の骨 集落遺跡からはイノシシやシカなどの獣骨も少なからず出土する。関東以西ではイノシシ類(ブタ)が飼われており、イヌを食べていた証拠もある。中～後期・奈良県唐古・鍵遺跡



⑧集落から出土した海獣類の骨 弥生文化の人びとは、身近な水田や水路から、河川や湖沼、沿岸、外洋まで、さまざまな場所で、さまざまな魚類、海獣類を対象とした漁撈活動をおこなっていた。分業が進んだ時期・地域では専門的な集団も存在していたようである。上左:クジラ 上右:イルカ 下:アシカ。中期～後期・長崎県原の辻遺跡

漁撈

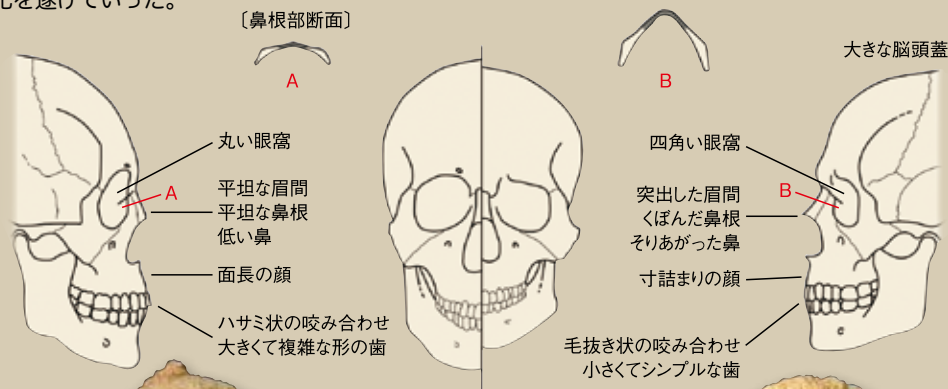


⑨弥生文化の貝塚 弥生文化には縄文文化のような大規模な貝塚は存在しない。愛知県朝日遺跡の貝塚は弥生文化のものとしては大規模なものである。中期



# 09 弥生文化の担い手たちの容姿

弥生文化のはじまりとともに、日本列島に暮らす人びとの容姿に大きな変化が生じはじめた。縄文文化の担い手たちが低身長で彫りの深い顔立ちだったのに対し、弥生文化の拡大とともに大陸系の長身で面長・彫りの浅い顔立ちの人びとが目立つようになっていった。また、社会の複雑化とともに朝鮮半島や中国を中心に周辺の諸文化との関係が深まっていくことで、衣服や装身具など、身を包むものも独自の变化を遂げていった。



① 縄文文化の担い手の顔（右）と弥生文化とともに広がっていった顔（左）

画像提供：いずれも国立科学博物館



② 近畿における弥生文化のはじまりころの人骨 縄文文化の担い手に近い形質の特徴をもつ。近畿で弥生文化がはじまったところには縄文文化の担い手に近い顔つきの人びとが多かったのかもしれない。前期・兵庫県新方遺跡



③ 東北の弥生文化の人骨 大陸系の要素が認められる子どもの骨。紀元前1世紀には東北まで大陸系の影響が及んでいた。中期・岩手県アバクチ洞穴遺跡



④ 弥生文化の担い手たちの自画像 彫りの浅い顔が多いが、彫りの深そうな顔（7・8）もみられる。顔の模様は入れ墨と考えられる。

- 1：福岡県上籬子遺跡出土木板の「絵画」（中期）
- 2：岡山県百間川兼基遺跡出土土偶（後期）
- 3：神奈川県蛭畑遺跡出土土人面付土器（中期）
- 4：愛知県亀塚遺跡出土土器の「絵画」（後期）撮影：T. Ogawa
- 5：神奈川県上台遺跡出土土人面付土器（後期）
- 6：群馬県有馬遺跡出土土人面付土器（後期）
- 7：長野県瀬ノ上遺跡出土土人面付土器（前期）
- 8：茨城県女方遺跡出土土人面付土器（中期）



⑤ 南海産の貝輪を模した青銅製腕輪 南海産の貝製のものを中心に、青銅やガラスなどさまざまな素材の腕輪が発達していた点も弥生文化の特徴のひとつである。後期・京都府大風呂南遺跡



⑥ さまざまな玉類 弥生文化では、ヒスイ、碧玉、ガラスなどのさまざまな素材によって多様な玉類がつけられていた。中～後期・奈良県唐古・鍵遺跡



⑦ 出土した絹と復元された衣服 関東の出土例もある。染色の技術も定着していた。中期・佐賀県吉野ヶ里遺跡

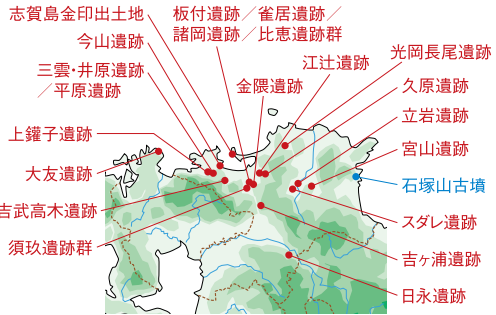




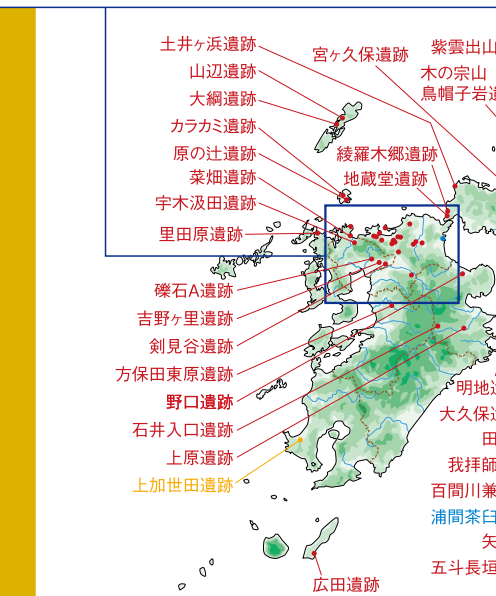
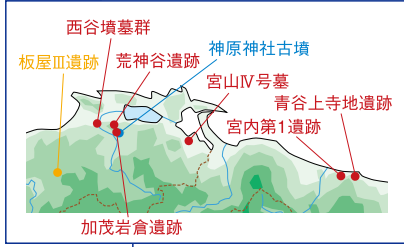
本書で紹介した  
遺跡



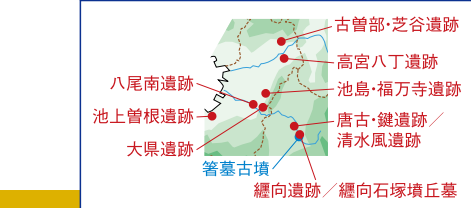
福岡



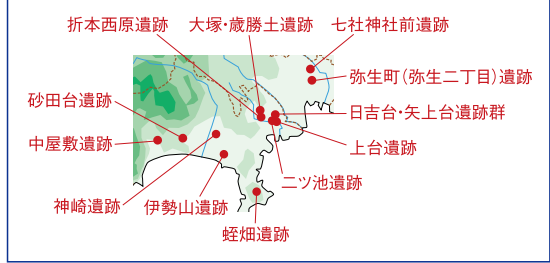
鳥根・鳥取



大阪・奈良



神奈川・東京



0 400km

- 弥生文化の遺跡
- 縄文文化の遺跡
- 古墳文化の遺跡
- 続縄文文化の遺跡
- 貝塚文化の遺跡